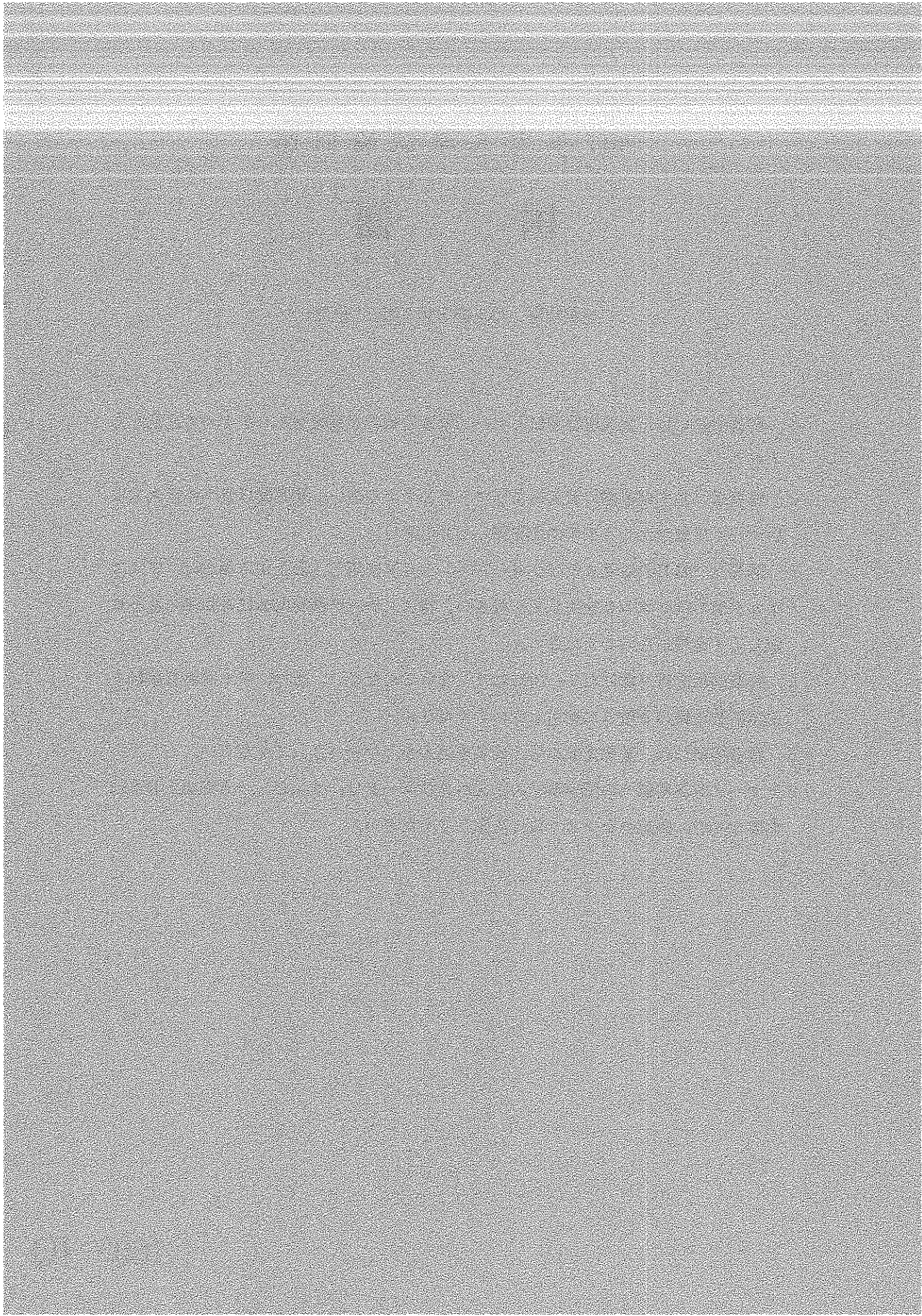


2017 年度 入学 試験 問題

国 語

(試験時間 13:35~15:05 90分)

1. 解答用紙には、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入およびマークしてください。解答欄以外への記入およびマークは無効となりますので注意してください。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。
4. 解答用紙を折り曲げたり、汚したりしないでください。また、マーク解答用紙を記述解答用紙の下敷きには使用しないでください。
5. 解答用紙には、必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。
6. マーク解答用紙への受験番号の記入およびマークは、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。



— 次の文章を読んで、後の間に答えなさい。(50点)

西ヨーロッパから発して世界中に広がった「西洋文化」は、現代の世界では、西ヨーロッパと北米を中心とし、周辺に東ヨーロッパ、ロシア、中南米、オセアニアがある大文化圏を形成しています。このうちロシアは、半ば欧米文化圏に属しながら、半ば独自の文化を維持し、中南米には、植民者の文化以前の土着文化が、いままも色濃く残存しています。

日本では明治以来、そしてとくに戦後、欧米文化圏の文化を世界の普遍文化と見て、学習に努めてきました。その結果日本人は、歴史と文化について、西ヨーロッパを中心として、世界を見るくせがつかまりました。百年以上昔の、西ヨーロッパの人であるカール・マルクスが考えた、「マルクス主義」に基づく歴史観は、西ヨーロッパを中心として歴史を見る見方の典型ですが、いまでも日本の知識層の世界認識に、ジンダイな影響を及ぼしています。

日本人は西洋文化に対し「片想い」とも言える態度を抱えています。アメリカや西ヨーロッパはもとより、「欧米文化圏」全体について言えることですが、日本の側からの発信を活発化することが、「片想い」解消のためにも大切なことです。発信の仕方には気をつけなければなりません。こちら側に見識がなく、欧米人におもねり、先方のものの見方に迎合するだけの発信は、百害あつて一利なしです。日本人の視点に立ち、欧米の外側から世界を見る、見識ある発言・発信こそ必要ですし、「欧米文化圏」の心ある人々も、それを日本に求めています。このためには学校における語学教育を、受信型から発信型に改める——欧米人の生活を題材に使い、欧米から学ぶことに主眼をおくのではなく、日本の事象を題材とし、欧米人に対して日本を説明することを重視する必要があるでしょう。

「片想い」とともに、欧米に対するコンプレックスも根深く存在しています。このコンプレックスを克服し、「片想い」の熱を冷ますには、西洋文化も世界にあまたある文化の一つと見て、西ヨーロッパの文化や価値観を相対化することが有効です。そのためには、次の五つのことが望まれます。

第一に、わたしたちが西ヨーロッパに向けている過度の関心を、広く世界の他の地域に振り向けることです。西ヨーロッパの

二、三の大国については、言語は日本中で学習されており、歴史や文化は詳細にわたって研究されています。学者や研究者だけでなく、一般の人たちの間にも、これらの国とその文化にあこがれ、その国のある側面、たとえば一つの地方とか、特定の作家や芸術家などに、マニアといってよいほど詳しい人がいます。

わたしたち日本人、とくにインテリ層は、西ヨーロッパの歴史や文化について、東アジアや東南アジアとはくらべものにならないほど、いろいろなことをよく知っています。西ヨーロッパ人の側は、それほど日本のことを知りもせず、関心もありませんから、知識・関心の大きな不均衡があります。西ヨーロッパに對する一方通行的な関心は、世界の他の地域でも見られる現象ですが、図書の翻訳収支比率などを見ると、日本人の「片想い」の度合いは、世界でも一番高いようです。

現在大学などで、西ヨーロッパ研究に向けられている研究者の数や予算は、東アジア研究や東南アジア研究を大幅に上回ります。こうした研究資源の配分を、西ヨーロッパから、東アジア、東南アジアなど他の地域に大幅に振り向けることが、日本人の視点に立った、真に日本人の需要に合う配分とするために必要です。

第二に、西ヨーロッパの過度の理想化をやめることです。何らの先入観なしに、日本人の眼で見れば、西ヨーロッパのことは何でもよいとの思い込みはなくなるはずで、たとえば西ヨーロッパでは、ときたま政治家の暗殺があり、なかなか犯人が明らかにならないことを知れば、西ヨーロッパの政治が日本の政治より、絶対的によいとは考えなくなるでしょう。

ただそのことは、口でいうほど簡単なことではありません。わたしたちは西ヨーロッパの事象を、西ヨーロッパ人の書いた書物によって学びます。もちろん著者はできるだけ客観的であろうと心掛けていますし、事実客観的な書物もありますが、多くの場合、西ヨーロッパ人本位の見方が入るのを、避けることができません。西ヨーロッパ人の著作から学ぶ限り、どうしても、西ヨーロッパの無意識の理想化が忍び込みます。

とくに、西ヨーロッパが世界に進出したここ五百年ほどの歴史については、西ヨーロッパ側の資料や情報は無数にありますが、征服され、植民地化された側の資料・情報は、比較にならないほどわずかしかなかったり、わずかな西ヨーロッパ外の資料・情報を渉獵・発掘し、足りないところを想像力で補わなければ、欧米の世界制覇が実際にどのように行われたかについて、歴史の

実相を知ることができません。

しかし困難なことであっても、西ヨーロッパの「近代」と称される時代が、南北アメリカ大陸の先住民をはじめとして、抹殺され、追い払われ、植民地化された、世界の他の地域の人々の犠牲の上に築かれたことに目をふさいで「欧米文化圏」の文化の眞実を理解することはできません。

第三に、西ヨーロッパの文化の、わたしたちの文化との異質性に注目することです。日本から見れば西ヨーロッパは、広大なユーラシア大陸の一番遠いところにありますから、文化的な違いも、他のユーラシア大陸の諸文化より大きいと、わたしには思われます。ところが戦後の日本では、西ヨーロッパの文化を人類の(4)な文化と崇めましたから、日本の文化的な違いは、「克服」しなければならぬ日本の「後進性」であるとか、「前近代性」であるとか考えました。文化的な違いは、あまり強調されませんでした。

しかし文化の違いは、厳然としてあります。たとえば文化人類学者の川田順造氏は、西ヨーロッパの伝統的な子育てとして、赤子の両足を伸ばしたまま、胸から下をミイラのように布でくるんで、傘立てに似た縦長の容器に、垂直に入れておく風習を紹介しています(『西の風・南の風——文明論の組みかえのために』)。このような子育てをよしとする西ヨーロッパ人のメンタリティーは、当然日本人とは(5)に異なります。

またよく言われることですが、人間と自然とを対立するものにとらえ、あくまで人間を優先させて世界を見る人間中心主義、あるいは言葉によってすべてを表現できるとする言語主義は、明らかにわたしたちの文化伝統とは違います。このようにメンタリティーや文化を異にする、西ヨーロッパのものの方や制度を、日本の風土にそのまま移植できないのは、自明のことです。第四に、西ヨーロッパを一体として見ることです。西ヨーロッパ人自身が西ヨーロッパを見る場合には、どうしても内部の個々の国民国家を意識します。しかしはるかに遠い東アジアから見るとわたしたち日本人の眼には、個々の国民国家とその間の相克を超えて歴史と文化を共有する、一つのまとまった西ヨーロッパの像が映ずるはずで

わたしがここで西ヨーロッパの人や事象をとり上げるとき、個々の国は挙げずにただ「西ヨーロッパ」とだけ記すことが多い

のは、このような考え方にに基づきます。全体としての文化的一体性と、内部の多様性から見て、西ヨーロッパ全体は、中国やインド、あるいはアメリカと比較することができません。

第五に、欧米文化圏の中の西ヨーロッパ以外の地域に、広く関心を移すことです。現代の欧米文化圏の、もう一つの中心であり、現在の世界の文化的中心といつてよいアメリカについては、後から述べます。周辺地域である東ヨーロッパ、ロシア、中南米、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドからも、わたしたちは「西洋文化」について学ぶことができます。場合によっては、こうした「周辺」地域から見た「西洋文化」の姿のほうが、実像に近いかも知れません。

これらの地域についての、日本人の関心・知識と相互関係とのバランス、先方の日本に対する関心・知識とのバランス、いずれも大きく均衡を失してはいません。相互の交流も、地域によって違いはありますが、かなり活発に行われています。ただその中ではロシアが、わたしたちにとつての重要性と歴史的親近性にもかかわらず、日本の若い世代の関心が弱まり、交流も先細りの傾向になっているのが気がかりです。

アメリカについては、西ヨーロッパと同じく、日本との間の関心と知識の不均衡や、過度の理想化の傾向が見られます。しかし日本の大学におけるアメリカ研究は、明治以来の歴史がないためか、学界にカッコ(7)とした座を占めているとは言えません。アメリカ研究所を設置している大学も、数は限られています。アメリカと日本との関係、日本人のアメリカにもつ親近感から見て、現在の日本のアメリカ研究は、相対的にまだ不足気味です。

日本人一般のアメリカに関する知識や関心も、かつてのアメリカ一辺倒の時期や、その後の嫌米の時期を経て、徐々に地に足のついたものになってきていると感ぜられます。ただ難をいえば、日本の対米関心に、黒人など有色人の観点が欠落していることと、政治はワシントン、経済と文化はニューヨーク、学問は東部の諸大学に集中する傾向があることです。日本からアメリカを眺めるわけですから、西部にもつと関心と知識が向けられてもよいでしょう。

地域と有色人の問題に関連しますが、長年アメリカで暮らし、有色人として、アメリカ社会の表の建て前と裏の現実の差を知り尽くした日系人の意見に、わたしたちはこれまで以上に耳を傾ける必要があります。

ここまでの記述から、「欧米文化圏」ないし西ヨーロッパの文化について、わたしが批判的であるとの印象をもった方が、おられるかも知れません。わたしは、日本が学ぶに値する文化が「欧米文化圏」の文化だけだとは考えません。他の文化や文化圏も、わたしたちが世界に生きる知恵を与えてくれます。しかしだからといって、「欧米文化圏」から学ぶ必要性を否定するものではありません。

日本であっても、「欧米文化圏」外の文化や文化圏であっても、将来にわたって欧米から学ぶことは、無数にあります。すぐれた個人の能力と個性を引き出し、伸ばして行く社会のシステム、選り抜かれた個人がつくり上げる、長い歴史的時間と世界全体を視野に入れた、スケールの大きな知的営為、明確な目的意識に基づいた、システム構想・構築能力——これらの点について、「欧米文化圏」は他のツイズイを許しません。⁽⁸⁾わたしたちが今後とも、欧米から学び取らなければならないところでは、「欧米文化圏」の中でも、現代の世界の知的・文化的中心となっているアメリカでは、近年のアジア系の学者などの活躍に見られるとおり、西洋文化の枠に囚われない、開放的で地球志向的な知的活動が行われています。こうした知的活動の開放性も、わたしたちの教訓としなければなりません。

しかし同時に、欧米世界の知的営為には、一見普遍性を志向しているかに見えながら、旧来の欧米中心的価値観を脱し切れず、欧米以外の文化・文化圏への、⁽⁹⁾と、⁽¹⁰⁾とが目立つものが多いことも事実です。わたしたち日本人が、欧米世界の知的営為に学ぶときには、「欧米文化圏」外の者としての冷徹な判断をもち、真の世界性を備えた一級のもの、そうでない二級以下のものを見分け、取捨選択することが不可欠です。

インドを中心とし、「インド亜大陸」と呼ばれることもある南アジア地域と、まさに西ヨーロッパの視点から「中東」、すなわち中ほどの東と呼ばれる、西アジアから北アフリカに広がる地域には、世界の四大文化圏の中の二つ、南アジア文化圏と西アジア文化圏が並び立ちます。サハラ砂漠以南のアフリカは、無数の小文化が残る、独特の文化圏を形成しています。

この三つの地域は、西アジアなどに少数の富裕な石油産出国がありますが、現代の世界の最貧困地帯です。それでも西アジアから北アフリカには、広く石油の恩恵が及んでいますし、南アジアにも、東アジア・東南アジアから、経済発展の波が寄せてき

ています。しかしアフリカの中南部だけは、五百年來の奴隷貿易と、西ヨーロッパの植民地支配の悲惨な影響から脱することができず、一部には内戦と飢えと疾病が猖獗する、見捨てられた大陸となっています。

文化的に見れば、南アジアと西アジアの二つの大文化圏は、世界の文化の発展に多大の貢献をしました。南アジアは汎神論的宗教、西アジアは一神教のハッシュウの地として、文化圏の範囲を超えた影響を、人類の生活と思考に及ぼしてきました。

日本との関係では、南アジアの汎神論的宗教の一つであり、変質を重ねて、東アジア・東南アジアの主要宗教の一つとなった仏教が、現代に至るまで、わたしたち日本人の思考と生活習慣に大きな影を落として来ました。西アジアのイスラム教は、日本との直接の関係は稀薄ですが、東南アジアの主要宗教の一つであり、また世界を圧倒するキリスト教的思考とは異なる、一神教的思考のもう一つの可能性を提示する文化として、わたしたちの関心を惹きます。

アフリカは大文化こそ生みませんでした。ジャズなどの音楽を通じて、現代アメリカの文化に、無視できない影響を与えました。アフリカ大陸のあちこちには、数世紀にわたる文化的破壊と停滞にもかかわらず、自然と人間との交流・交感のモデルとなるような、すぐれた森とサバンナ（草原）の文化が生きています。いまもつづく自然と文化の破壊に抗して、優しいけれども力弱い小文化を守ることができかどうかは、人類全体の課題でもあります。

日本人の国際意識の中では、この三つの地域は、日本との関係がソエンな地域でした。西アジアの石油産出国が重要視されたことはあっても、大方は、「援助」の対象となる「途上国」として意識されただけでした。

それでもアジア経済研究所などの長年の努力により、少数ながら優秀な研究者が養成され、かなりのレベルの地域研究が進められています。⁽¹⁴⁾三地域の文化の日本への紹介も、少数の愛好家や研究者の手で細々ながらなされており、国際交流基金も支援を惜しんでいません。ただ研究の成果は国民の常識となるには遠く、文化の紹介も一部の愛好家の範囲を超えず、相互の交流が活発化しているとは言えません。

この三つの地域の文化には、欧米の人たちの偏見が強く、多くの日本人も、欧米人の見方を無批判に受け入れているため、これらの地域に対する偏見は、なかなか消えません。⁽¹⁵⁾わたしたちにとって大切なのは、欧米人の眼を通してではなく、自分自身の

眼で、三つの地域の文化を見、これらの地域の人たちと直接の交流を行うことです。「松のことは松に習え、竹のことは竹に習え」とは、松尾芭蕉の言葉ですが、インドのことはインド人に、アフリカのことはアフリカ人に習わなければなりません。

現代の世界を覆う欧米の文化とは異なった、人生や社会へのとり組み方、別の発想や制度が、これらの地域には豊かにあります。欧米の文化を相対化し、日本人の視点に立つて世界の明日を考えるために、この三つの地域の文化の研究と理解、そして相互の直接の交流は必須のことです。

(加藤淳平『文化の戦略』による)

注 カール・マルクス……ドイツの経済学者・思想家(一八一八―一八八三)。 涉獵……広く探し求めること。書物や文

献を読むこと。 ユーラシア大陸……ヨーロッパとアジアを一体とした地域。 川田順造……日本の人類学者(一九

三四)。 猖獗……悪い物事がはびこり、勢いを増すこと。

〔問一〕 傍線(2)(7)(8)(11)(12)のカタカナを漢字に改めなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問二〕 傍線(1)「日本人は、歴史と文化について、西ヨーロッパを中心として、世界を見るくせがつかまりました」とあるが、その日本人の態度としても適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 西ヨーロッパの人間中心主義に影響を受け、自らの文化をそれに融合させ、他の地域の文化については無関心な態度。
- B 西ヨーロッパの価値観を無批判に受け入れ、自らの文化に無頓着なまま、過去の植民地主義を積極的に肯定する態度。
- C 西ヨーロッパの歴史観を絶対化し、自らの文化を積極的に評価することなく、他の地域の適切な資料収集を怠る態度。
- D 西ヨーロッパの特異性を看過し、自らの文化に対し評価を下すことなく、他の地域との関係性に注意を払わない態度。
- E 西ヨーロッパの文化を理想化し、自らの文化に対する劣等感をもち、西ヨーロッパ以外の歴史や文化を軽視する態度。

〔問三〕 傍線(3)「欧米人におもねり、先方のものの見方に迎合するだけの発信は、百害あって一利なしです」とあるが、その説

明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 日本を理解してもらうのに必要な情報を欧米人に対して発信することができず、日本と欧米の間の相互不信が強まる。
- B 日本マニアの欧米人の知識欲しかみたくことができず、マニア以外の欧米人の日本に対する理解がほとんど進まない。
- C すでに先方が知っている情報を繰り返し発信するにとどまり、相互理解を促進するための情報提供がなされていない。
- D 欧米人の歓心を買う情報の発信のみでは適切な相互理解が促進されず、欧米への日本人独自の視点が欠落してしまう。
- E 欧米人の気持ちを感じやった情報は彼らの優越感を増長させる結果となり、欧米中心主義のさらなる拡大につながる。

〔問四〕 空欄(4)(5)に入れる組み合わせとしてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|-----|-----|-----|-----|
| A | (4) | 規範的 | (5) | 総合的 |
| B | (4) | 絶対的 | (5) | 相対的 |
| C | (4) | 模範的 | (5) | 根本的 |
| D | (4) | 原初的 | (5) | 実質的 |
| E | (4) | 中心的 | (5) | 論理的 |

〔問五〕 傍線(6)「西ヨーロッパを一体として見る」とあるが、それを提唱している理由としてもっとも適当なものを左の中から

選び、符号で答えなさい。

- A 西ヨーロッパを総合的に考えることで、その文化的共通性を描き出すことができるから。
- B 西ヨーロッパを単一のものとして捉えることで、他の地域との思想の違いが明確になるから。
- C 西ヨーロッパを包括的に見ることによって、他の地域と比較することが可能となるから。
- D 西ヨーロッパを全体として理解することによって、その価値の普遍性が鮮明になるから。
- E 西ヨーロッパを全般的に捉えることで、歴史の大きな流れがより明瞭に把握できるから。

〔問六〕 空欄(9)(10)に入れる組み合わせとしてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|-----|-----|------|-----|
| A | (9) | 不信感 | (10) | 畏怖心 |
| B | (9) | 片想い | (10) | 先入観 |
| C | (9) | 敵対心 | (10) | 同情心 |
| D | (9) | 理解力 | (10) | おごり |
| E | (9) | 無理解 | (10) | 優越感 |

〔問七〕 傍線(13)「三地域の文化」とあるが、その地域を表す組み合わせとしてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A インド文化地域・西アジア文化地域・北アフリカ文化地域
- B 南アジア文化地域・西アジアから北アフリカにおよぶ文化地域・サハラ以南のアフリカ文化地域
- C アジア文化地域・ヨーロッパ文化地域・アフリカ文化地域
- D 東アジア文化地域・西アジアから北アフリカにおよぶ文化地域・サハラ以南のアフリカ文化地域
- E 東南アジア文化地域・中東文化地域・サハラ以南のアフリカ文化地域

〔問八〕 傍線(14)「わたしたちにとって大切なのは、欧米人の眼を通してではなく、自分自身の眼で、三つの地域の文化を見、これらの地域の人たちと直接の交流を行うこと」とあるが、その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 欧米の文化に対する客観的な態度が生まれ、今後の世界の在り方に関する示唆が得られるから。
- B 三つの地域の音楽や宗教の在り方を理解することで、欧米による文化の破壊を阻止できるから。
- C 「途上国」に対する新たな理解が生まれ、国際機関の政策に対して望ましい影響を与えるから。
- D 欧米人の視点に頼らない新しい価値観が生まれ、人類のさらなる発展の可能性が生まれるから。
- E 三つの地域において日本文化の紹介が進むことで、互いの学問や芸術の進展が期待できるから。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(20点)

「政治」とは、ある時期に構想され、また実際に打ち立てられた近代国家という政治体制にまつわる諸々の事象を指している。近代国家はそれまでの政治体制とは根本的に異なる全く新しい制度であった。今も我々は基本的にその制度の中にいる。

ならば、まずはその新しさがどこにあったのかを探るところから議論を説き起こさねばならない。すなわち、この新しい制度が打ち立てられる以前、社会がどのような制度のもとにあったのかを検討しなければならぬ。その古い社会制度とは、「封建国家」と呼ばれるものだ。

「封建的」という言葉はかつて、否定的な意味を込めてよく用いられた。たとえば、「うちの父親はとても封建的である」という物言いがしばしば耳にされたが、そこには「強権的である」「権威主義的である」「(1)」等々の強い非難の意味が込められていた。おそらくこれらのイメージは無根拠ではない。だが、これら否定的なイメージが普及していたせいで、制度としての封建国家がいかなるものであったかが見にくくなってしまっている。実際のところ、それはいかなる体制であったのだろうか？

「封建国家」は一般に、多数の独立権力が、国王を最高封主とする封建的主従関係の網の目を通じて組織化されている国家と定義され、最も典型的な形でみられるのは九世紀から一三世紀までの西欧においてである、と言われている。

この一般的な定義から三つのポイントを導き出せよう。

最初のポイントは、封建国家が九世紀から一三世紀という中世のど真ん中の時期に最も典型的な形で存在していたということである。このことは、一四世紀から、近代の開始地点として見られる一六世紀までは、それは典型的な形では存在していなかったこと、したがってその間、ゆるやかな崩壊の過程にあったことを意味する。

封建国家は何らかの理由でその維持が困難となっていたのであり、それに次いで近代国家は誕生した。すると近代国家には、封建国家が抱えていた何らかの問題点の解決が期待されていたはずである。すなわち、その問題点の解決を見据えた設計が試み

られていたと考えられる。

二つ目のポイントは、封建国家が多数の独立権力を抱えており、それら独立権力が「網の目」状に組織化されていたということである。網の目状とはどういうことなのだろうか？ また「独立権力」というが、権力が独立しているというのはいったいどういうことなのだろうか？

ここから注目されるのが三つめのポイント、国王の存在である。封建国家には国王が存在する。さて、ごく一般的に考えると、国王は最高権力者であろう。ところが封建国家には、多数の独立権力があつたとも言われている。これはどういうことだろうか？

最高権力者がいるのに、その脇に独立した権力が多数存在しているという逆説。この逆説にこそ、近代的な常識では説明しきれない、封建国家の独特な有り様が、最も特徴的に現れているように思われる。

封建国家を考える上で避けて通れない書物に、フランスの歴史家マルク・ブロックの『封建社会』がある。封建国家の生成から、その政治経済体制の実際までを詳細に論じたこの本は、近代国家と異なる封建国家の特殊性を非常に分かりやすく伝えてくれているが、その中でブロックは、王権を含む様々な上位権力について次のように述べている。封建時代のヨーロッパでは、領主や家族、村落共同体や家臣集団などの上に、より広い範囲におよぶ様々な権力がそびえ立っていた。ところが、「それらの上位権力は、広域支配の代償として、長いこと、実効性に乏しい活動しかできなかつた」。

話を単純化するために、ここでは上位権力を王権に絞ろう。王権は確かに存在した。しかもブロックが強調しているように、それは封建制よりもはるかに古いものである。封建制が成立する以前から、王権は存在していた。ところが、王権は広い範囲を支配の対象としていたために、実際には支配していなかつた。

この頃の王権は、「権力」というよりは「権威」という言葉で理解した方がよいように思われる。たとえば中世のフランス王について、「王の奇跡」と呼ばれる有名な信仰があつた。それによれば、王が病者に触れることで病が治ってしまうのだという。まさしくブロックがこの「王の奇跡」について研究書を残しているのだが、それによれば、一一世紀から一八世紀までの長きに

わたつて、王は主に瘰癧ろれきと呼ばれる病にかかった者たちに手で触れるという行いを続けた。

それで病が治ったのかどうかは、もちろんここでは問題ではない。問題は、一見したところ政治権力の頂点にいるように思われる国王が、病人(2)に手で触れて病を治すという行為を熱心に行なっていたという事実⁽²⁾に他ならない。王の強力な権威が、触れた患者の心身に何らかの影響を及ぼしたことは容易に想像できる。王はそれほどまでの超越的な権威の持ち主ではあった。だが、別の言い方をすれば、そうした権威の持ち主に過ぎなかつたのであり、実効的な権力を有してはいなかつたのである。

ブロックによれば、「王が封建諸侯によく服従されなかつたり、戦いをしかけられたり、愚弄されたり、ひいては捕虜にされたりした例は、事実、枚挙にいとまがない」。なんとも惨めと言わざるをえないが、しかし、実際に臣下の手にかかつて非業の死を遂げた王もまた、ブロックによれば正確なところ三人しかいないのだという。

つまりこういうことである。確かに王権は存在しており、神秘的なまでの権威をもつてはいる。しかし、実際の統治は各地の封建領主が独立して行っていたのであり、王はそれに対して口出しする余地はなかつた。とはいえ、各地の権力者も王の権威をそれなりに尊重していたのであつて、よっぽどの事がなければ、それに刃向かうことはなかつた。そのような微妙なパワーバランスのもとで、統治が行われていた。

しかも統治に関わる政治的アクターは、国王と封建諸侯だけではない。「頂点には諸王国と神聖ローマ帝国があり、その権力や野心を遠い過去から受け継いでいた。もつと低いところでは、より新しい支配権が、大は領域君侯領から小は単なるバロン領や城主領にいたるまで、ほとんど識別しがたい段階をなして、重なり合っていた」。

上は神聖ローマ帝国から、下は城主領まで、複雑な権力関係が複雑な階層をなして重なっている。国王が上から指示を出して統治するのではなくて、政治的アクター間の微妙な力関係で統治が動いていく。分かりやすく言えば、縦型ではなくて横型の社会である。今の言葉で言えば、(3) 社会とも言えよう。これが封建国家の「網の目」状の統治機構に他ならない。

今度はこの「網の目」を作り出しているものについて考えよう。封建国家の網の目状の統治機構を実際に形づくっているのは契約関係である。主君（封主）は家臣（封臣）に対し、土地や官職、金銭や徴税権などの封を授与するとともに、その保護や養

育を約束する。それに対し家臣は、主君を裏切らないなどの消極的な義務の他、軍事的奉仕など積極的義務を約束する。そのような双務的契約関係、いわゆる封建的主従関係が、封建国家を形づくっている。

これは双務的契約である。したがって、封臣は確かに封主に忠誠を誓っているけれども、封臣の方も封主に対して義務の実行の遵守を要求できる。しかも、あくまでも二人の間の契約であるから、封主が義務を遵守しているかどうかは、封臣たち自身の判断によって判定される。

封主が契約に違反したと判定されれば、封臣たちは封主に対する一切の義務から解放され、封主に対して実力で反抗することも可能であった。つまり、封建的契約関係とは、確かに支配と服従の関係だが、そこには、封主と封臣の対等の関係があった。これは契約当事者間に独自の緊張感を作り出していただろう。

さらに、これはあくまでも個人対個人（封主対封臣）の契約である。したがって家臣には、複数の契約を結ぶことも可能であった。一人の家臣が同時に多くの主君に仕える場合があったということだ。実際、一二世紀のバイエルンの伯は二〇人の主君を持っていたという。

複数の契約を結ぶのだから、基本的にはどこの誰とでも契約を結ぶことができる。たとえば、一人の家臣が同時にイギリスとフランスの国王や貴族に仕えることが可能であったし、実際、そうした事態は普通のことであった。

すると実に奇妙な——近代的な常識からは奇妙に思える——事態がそこには見いだせることになる。封臣が複数の封主と契約を結んだり、あるいは遠方の封主と契約を結んだりしている場合には、その封臣の支配地域がいったいどの国に属しているのかが不明確である。つまり、封建国家⁽⁴⁾についてはその領土を語ることができない。封建国家には領土の概念がない。封建国家にあるのは、契約による人的結合だけである。確かに国王はいるのだが、その支配地域の封臣は、隣国の、あるいは海を超えた国の封主と契約を結ぶこともあり得たのだから。

すると、さらに興味深いことが分かる。領土が存在せず、契約関係だけが複雑に絡み合っているのだとすれば、どこまでが国内でどこからが国外かを確定することもできない。つまり、封建国家においては、国内社会と国際社会という区別が成り立たな

い。近代国家は何よりもまず、領土によって定義される。だから、その常識に慣れ親しんでいる我々にとっては、これはなかなか想像できない世界であろう。しかし、そうした領土の概念で国家を見る見方の方が新しく、また歴史も浅いのである。

(國分功一郎『近代政治哲学——自然・主権・行政』による)

注 マルク・ブロック……フランスの歴史学者(一八八六—一九四四)。

瘰癧……頸リンパ節が数珠状に腫れる、結核症

の特異型。

神聖ローマ帝国……一〇世紀から一九世紀までヨーロッパに存在した国家。

バロン領……バロン(爵

位)を持った貴族の所有する土地。

〔問一〕 空欄(1)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 利己的な行動をとり続ける
- B 自由な生き方をみとめない
- C 無責任な発言を繰り返かえず
- D 品位のかけらもみられない
- E 謙虚な性格を小ばかにする

〔問二〕 傍線(2)「病人に手で触れて病を治すという行為」とあるが、筆者は国王のこのような行為にはどのような効果があると考えているのか、もつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 国王が抜きこんだ権威を有することで、国民に広く影響を与えることを示す効果。
- B 国王が人民と触れ合うことで、国王と人民の間の直接的な主従関係を強める効果。
- C 国王が治療により病気の流行を防ぐことで、慈悲深い存在であることを示す効果。
- D 国王が人間を超えた神秘的な力を持った、神と同等の存在であることを示す効果。
- E 国王が医学的知識や能力により、国民の信頼を得て国家の統一性を強化する効果。

〔問三〕 空欄(3)に入れるのもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 協働主義
- B 自由主義
- C 地域連合
- D 民主主義
- E 地方分権

〔問四〕

傍線(4)「封建国家についてはその領土を語ることができない」とあるが、その理由としてもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 本来は封主と封臣の契約によつて成り立つ領土という概念が、封建国家においては両者の契約に対する認識の相違によつて確定されなかったから。

B 封建国家では領土をめぐつて複数の封主の間で争いが頻発し、勝者がしばしば変わるので、固定的な境界の確定を行うことが不可能であったから。

C 封建国家では所有権の概念が存在していなかったため、各自が自分のものであると主張する領土が誰のものなのかを正確に判断できなかったから。

D 封建国家では封臣はしばしば複数の封主や遠方の封主と契約を結んでいたため、封臣が保有する土地がどの国に属するのかが不明確であったから。

E 封建国家では封主と封臣の間の契約は国家の枠にとられずに個別になされており、その契約には原則的に領土の定義が存在していなかったから。

〔問五〕本文中では「封建国家」と「近代国家」の違いはどのように説明されているか、もつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 封建国家では個人間の契約によって権利義務関係を形成するが、近代国家では常に国家間の契約による領土の確定によって国家を形成する。
- B 封建国家は国王と家臣の主従関係から生ずる絶対的な王権の力によって成立し、近代国家は議会を中心とした統治の仕組みによって成立する。
- C 封建国家では家臣には主君を裏切らないなどの義務の他、軍事的奉仕などの義務が課されるが、近代国家では国民には納税の義務が課される。
- D 封建国家は独立した権力を持つ多くの封主と封臣の契約が重層的になされることで成立し、近代国家では領土の存在によって国家が成立する。
- E 封建国家では封主と封臣の単一的な主従関係によって国家が成立するが、近代国家では国際条約による領土の確定によって国家が成立する。

三 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(30点)

これも昔、大膳亮だいぜんのすけのたい大夫橋おほちばなのもろなが以長もちながといふ藏人の五位ありけり。宇治左大臣殿より召しありけるに、「今日明日はかたき物忌ものいを仕る事候つかまつふ」と申したりければ、「こはいかに(2)世にある者の、物忌といふ事やはある。たしかに参られよ」と、召しきびしかりければ、恐れながら参りにけり。さる程に、十日ばかりありて、左大臣殿にかたき物忌出で来にけり。御門の狭間はさまにかいだてなどして、仁王講行はるる僧も、高陽院かやのゑんの方の土戸より、童子なども入れずして、僧ばかりぞ参りける。御物忌ありと、この以長聞きて、急(3)ぎ参りて、土戸より参らんとするに、舎人とねり二人ゐて、「人な入れそと候まふ」とて、立ち向かひたりければ、「やうれ、おれらよ、召されて参るぞ」といひければ、これらもさすがに職事しきじにて常に見れば、力及ばで入れつ。参りて、藏人所にゐて、何となく声高に物いひゐたりけるを、左府聞かせ給ひて、「この物いふは誰ぞ」と問はせ給ひければ、盛兼申すやう、「以長に候まふ」と申しければ、「いかにかばかりかたき物忌には、よべより参り籠もりたるかと尋ねよ」と仰せければ、行きて仰せの旨をいふに、藏人所は御所より近かりけるに、「くはくは」と大声して、はばかり申すやう、「過ぎ候ひぬるころ、わたくしに物忌仕りて候ひしに召され候ひき。物忌の由を申し候まひ(5)を、物忌といふ事やはある。たしかに参るべき由仰せ候まひ(6)ば、参り候ひに(7)。されば物忌といふ事は候はぬと知りて候ふなり」と申しければ、聞かせ給ひてうちうなづき、物も仰せられてやみにけりとぞ。

〔宇治拾遺物語〕による)

注 宇治左大臣殿……藤原頼長。後出の左大臣殿、左府も同じ。 かいだて……盾を垣のように並べて通行を遮断すること。

仁王講……『仁王般若経』の法会。 舎人……天皇・皇族・貴人の身邊の雑用をつとめた者。

職事……藏人頭及び、五位、六位の藏人の総称。 くはくは……これはこれは。

〔問一〕 傍線(1)「かたき物忌を仕る事候ふ」の解釈としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 大変な物忌のために、これを防ぐのはとても難しいのです。
- B 家に籠もっている物忌を、厳しく閉じ込めなければなりません。
- C 嚴重な物忌で、家の中を見回っていないければならないのです。
- D 避けられない物忌が身に迫っていて、家に帰れないのです。
- E 嚴重な物忌で、家に籠もっていなければならないのです。

〔問二〕 傍線(2)「世にある者の、物忌といふ事やはある」の解釈としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 朝廷に仕えている者が、物忌も知らないで、命令を遂行することなどできるはずがない。
- B 世間に知られた者が、物忌を無視して、命令に従わないなどということは、許されない。
- C 朝廷に仕えている者が、物忌のために、召集にも応じないなど、許されないことだ。
- D 朝廷に仕えている者が、たかが物忌のために家に帰るとは、とうてい許しがたいことだ。
- E 世間に知られた者が、物忌のために、家に帰らなければならないとは何と情けないことだ。

〔問三〕 傍線(3)「急ぎ参りて」とあるが、それはなぜか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 今度は早く行って、ほめてもらおうと思ったから。
- B 今度は早く駆けつけて、手伝おうと思ったから。
- C 今度は早く行って、あやまろうと思ったから。
- D 今度は早く行って、仕返しをしようと思ったから。
- E 今度は早く駆けつけて、罪を償おうと思ったから。

〔問四〕 傍線(4)「よべより参り籠りたるかと尋ねよ」は、左大臣のどのような気持ちを表しているか、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A この重い物忌の最中に、なぜ以長が戒を破って屋敷に入ってきたのだろうか、疑問を抱いている。
- B この重い物忌の最中にもかかわらず、以長が戒を破ってまで屋敷にきてくれたことを、喜んでいる。
- C この重い物忌の最中に、以長がまさか戒を破って屋敷に入ったのではあるまいな、と不安に思っている。
- D この重い物忌の最中にもかかわらず、以長がやっと和解に屋敷まできてくれたと、安心している。
- E この重い物忌の最中なのだから、以長はきつと一緒に戒を守ってくれるはずだと、信頼している。

〔問五〕 空欄(5)(6)(7)に、助動詞「き」を正しく活用させて書き入れなさい。

〔問六〕 本文の内容の説明として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 以長は物忌のため、宇治左大臣の呼び出しをいったん断つたが、やはり思い直して参上した。
- B 宇治左大臣は、物忌のことを聞いただして、以長を厳しく処罰するために、呼び出した。
- C 宇治左大臣の命令で、舎人達は以長を屋敷の中へ招き入れ、丁寧に蔵人所まで案内した。
- D 以長は、物忌の最中の宇治左大臣の屋敷にでかけて、以前に戒を無視したことを謝った。
- E 以前とがめた物忌のことを、同じ論法で反論されたので、宇治左大臣は以長を処罰できなかつた。

